

ドキュメント



助け合い

CASE 1



おおしま
大島六丁目団地
東京・江東区

夜間自主防災訓練 訓練で絆を強めて 万が一に備える

日が落ちた18時半すぎ、東京都江東区の大島六丁目団地の広場に、防災リュックを担いだ居住者が集まりだした。夜間の地震発生を想定し、翌朝にまで及ぶ本格的な防災訓練が始まった。万が一に備え、居住者の絆の強化を目指す訓練に密着。団地の防災力を上げる取り組みや考え方を取材した。

★以外の写真：野弘路
取材：文川信彦



18:30
震度6強の
地震発生



自治会副会長の齊藤康則さんは、防災活動の中心となって居住者を引っ張る

19:00

災害対策本部の設置



団地中央の広場に災害対策本部のテントを張る自治会メンバー（上）。暗い中で、懐中電灯の明かりを頼りに名簿を確認するも、夜間訓練ならではの対応（下）

19:20

防災設備の確認・点検



訓練には、消防署も協力。消防車を団地の近隣に止め、署員が消防設備の使い方を説明する



19:30

けが人、要援護者の移送・手当て



居住者が倒れたたんすの下敷きになりけがをしたことを想定した救助訓練（上）。毛布で応急タンカを作り、けが人を運ぶ訓練（中）。心臓マッサージの訓練（左下）。足の不自由な居住者を車いすで避難させる訓練（右下）



8月23日金曜日、まだ昼間の暑さが少し残る18時半。夕闇の中、大島六丁目団地の各棟から、ヘルメットや帽子をかぶり、防災リュックを背負った居住者が中央広場に集まってきた。広場に設置された災害対策本部のテントで、懐中電灯の光を頼りに点呼を行う。こうして、翌朝にまで及ぶ長い防災訓練が幕を上げた。

要援護者を救護するグループ、各棟の防災設備を点検するグループに分かれ、それぞれ動き始めた。けが人の応急処置と移送は地元消防署員の指導のもと実施。室内のたんすが倒れてけがをした居住者を、毛布を使って応急のタンカを作り、屋外へ移送した。一方、救護グループは、自治会で把握しているリストをもとに、数人1組で足の不自由な居住者などを訪ね、無事を確認。車いすに乗せて屋外に連れ出した。

大島六丁目団地は都営地下鉄新宿線大島駅から徒歩1分の場所にある。総戸数は約2900戸。11〜14階建ての7棟から成る。敷地内にスーパーマーケットや各種の店舗があり活気がある団地だ。「私は何をやっていいの!」「俺はどこに行けばいいんだ?」。集まった参加者から戸惑いの声が上がった。しかし、防災関連団体の役員経験がある自治会の齊藤康則副会長は「今回はぶっつけ本番で役割分担も決めていません。どのくらい参加してくれるかも未知数です。スケジュールもおおまかです。そのほうが実践的ですから」と今回の趣旨を伝える。

「防災訓練を毎年11月に行つて、居住者はひと通りの防災知識を身に付けています。ただ万が一の際、本当に重要なのは『自分で考えて動く』ことです。指示待ちにならず、臨機応変に動く大切さを共有できればと考え、今回はあえて綿密なプランは用意しませんでした」（齊藤副会長）。

齊藤副会長の指示で、けが人の応急処置と移送を行うグループ、

「団地ができて40年以上たち、居住者の構成は大きく変わりました。70歳以上の方が700人以上暮らしていて、要援護者が約120人います。こうした方々を助けるためにも、実践に即した訓練が必要だ」と自治会長の中島

政幸さんは言う。

次に行ったのは避難経路の確認。大島六丁目団地は近隣の広域避難場所に指定されている。大規模災害が発生した場合、近隣住民が団地内に避難してくる。江東区と自治会が協定を結んでいることもあり、津波発生の際には避難者を上階や屋上に誘導する必要がある。その際の避難場所や経路をチェックした。

炊き出しや深夜の巡回も

小さなトラブルは、炊き出しの調理機器を出そうとした備蓄倉庫でも。「鍵は誰が持っている？」「俺は持っていない」「本部でしょ？」。また、「カレーは何人分温めるの？」という疑問の声も。訓練参加人数がうまく伝わっていない。こうしたドタバタはありつつも、スケジュールは順次、進行。21

時すぎには、大集会所で、参加者は炊き出しのカレーライスを食べた。食事後は防災ワークショップを開催、講師は齊藤副会長が務めた。自作のスライドなどを使って防災の意義や課題、防災グッズの使い方などを参加者に易しく解説した。

ワークショップに参加したインド人のシン・ラメシュさんは仕事帰りに駆け付けた。自動車メーカーにエンジニアとして勤務するシンさんは10年前に来日し、4年前から大島六丁目団地で暮らす。「自治会棟代表の一人として、外国人居住者と日本人との橋渡しを務めています。いざというとき慌てないため、こうした訓練は非常にいい経験になります」

同じ頃、中島会長や自治会防災部メンバーは別室で防災対策会議を開き、現在までの訓練の反省点を話し合った。あちこちで上がった疑問や戸惑いの声を聞いていた中島会長は「避難ルートや備蓄倉庫の鍵の管理など、分かっていると思っていたことでも、実は曖昧だったことがいくつも明らかになりました。それが分かったことが

居住者の助け合いを訴える

一歩前進です。課題を次に生かしましょう」と話した。ワークショップ後、参加者は一旦帰宅。自治会幹部は、今回の訓練の様子をまとめた壁新聞を作ったり、団地内を巡回パトロールするなど精力的に訓練を続けた。寝袋を持参した自治会防災部メンバーが大集会所で眠りについたときには、深夜0時を回っていた。

居住者の助け合いを訴える

がもっとお互いのことを知って声を掛け合っていきたいと思います。一番、防災力を強くするのは、ご近所に知り合いを増やすことです。今回の訓練が、そうしたコミュニケーションの機会になれば、よかったですね」と話した。実際、訓練の中で参加者たちが、声を掛け合う姿があちこちで見られた。「あなたは何階？ うちが13階」「うちは10階だけ地震でエレベーターが動かなくなると大変よね」といった会話。「お隣に足の不自由なおばあちゃんがいるの。自治会のリストに入っているかしら」といったご近所を気遣う声。

居住者の助け合いを訴える

「東日本大震災でも建物に大きな問題は生じませんでした。団地内はこの地域の中では安全な場所だと思っています。ただ、高い防災力を支えるのは、最終的には居住者同士の協力です。訓練を重ねて地域の絆をもっともつと強くしたいと思っています」と中島会長は目標を話した。

翌朝6時すぎ、参加者が再び大集会所前に集まってきた。全員でラジオ体操を行い、その後、中島会長と齊藤副会長が訓練を締めくくった。そこで二人が強調したのは、居住者が助け合う絆だ。「震災発生時にすぐ対応できるのは町会や自治会などの地域のコミュニティです。つまり一番大切な初動時に力を発揮するのが、居住者同士の連携という絆です。今回の訓練でも協力することの大切さが再確認できたと思います」と中島会長。

齊藤副会長も「まずは自分が自主的に判断してしっかり行動しましょう。そして、さらに居住者同士

最後に非常食や太陽光で充電できるLEDライトなどの防災用品を配り、解散。日をまたいだ長い訓練が終了した。



訓練の一環として寝袋を持参し、大集会所で眠った参加者もいた

翌朝の訓練スタートはラジオ体操から(右)。最後に非常食など防災用品を配布した(左)



07:00



体操、終了セレモニー

24:00



就寝

訓練の様子をまとめた壁新聞を深夜に作成、大集会所の入り口に掲示した



23:00



壁新聞作成・団地内巡回点検



深夜、高層棟のハトロールをする中島政幸会長たち自治会メンバー



21:30



防災ワークショップ



防災関連団体の役員経験がある齊藤副会長の防災講座に参加者は熱心に聞き入った(上)。ワークショップに参加した外国人居住者のシン・ラメシュさん。防災グッズの使い方を熱心に学ぶ(下)

21:00



炊き出し、宿泊場所への誘導



炊き出しも訓練の重要なプログラム。みんなでカレーを食べて一体感を深める

20:00



近隣避難所への経路確認



訓練は敷地外にも及んだ。近隣の避難所へのルートを実地確認した

